

真高寺だより

第23号 平成27年1月1日発行

発行所：真高寺（伊澤孝順住職）

住 所：市原市飯給1143

電 話：0436-96-0058

*発行責任者 根本 貞夫

*編集責任者 木村 孝一



謹賀新年

(写真提供：山内憲章氏)



総代会長 根本 貞夫

明けましておめでとうございます。真高寺の一大事業であった山門解体修理事業は12年前の未年に開始されました。その折、浄財勧募のお願いや事業の進捗状況をきちんと皆様にお知らせするために、「真高寺だより」を年2回発行することといたしました。大切な浄財の収支を全てガラス張りにし、一切の不正を排除して疑念を持たれないようにするとの思いからでした。初の頃は全てワープロで作成し、文字だけの横書き素人新聞でした。その後皆様からのご意見もあり、より見やすく分かりやすくするために、写真を多く取り入れてカラー印刷としましたが、今でも相変わらず横書きの素人新聞です。

今年は未年、丁度干支が一回りしたわけです。この間、ご尽力された前佐久間常壽総代会長に代わり、私がその任を穢しております。

年頭に当りまして、何よりも菩提寺の繁栄と共に私たち檀家の皆様が日々平安無事でありますと共に、誰しもが無病息災、否、一病息災でこの一年を過ごされますよう心から念じております。

道元禪師のおことば

「他人にしたがひてうるにはあらず」(道得)

おことばの意味

仏教の悟りを他人から教えてもらおうとしても得られない。どんな偉い坊さんから言葉で説明されても、他人からは得ることは出来ない。お茶をグッと飲む瞬間、理屈抜きで「ああ、うまい」と感ずる生命の尊い力を、自分で自分の体の中に発覚するのが仏教の悟りである。寺に来ようが来まいが、お茶の味は誰でも同じでないか。

次世代への責務

住職 伊澤孝順



明けましておめでとうございます。去年は皆様にとってどのような一年でしたか。新年を迎え、これから始まる一年、多くの可能性に満ちている事でしょう。

「一年の計は元旦にあり」の諺のように常に一年、一年の目標を立てて行きたいものです。古来より元旦の元は、年の始めであり、旦とは日の出を意味し、年と月と日の始めを三元と言い、その三元の朝を元旦と言います。

ところで大本山総持寺にて二祖峨山詔碩禪師650回大遠忌報恩行で今年の10月まで奉修されます。奉修のテーマが「相承～大いなる足音がきこえますか～」です。まさに曹洞宗の開祖道元禪師様の祖道を学び、瑩山禪師様と峨山禪師様の御両尊と良縁を結び、次世代へ如何に相承するかを研修して行かなければならない責務があり、今年より深く考えて行きたいと思います。

大本山永平寺別院長谷寺で修行している次男尚孝が有難き縁で首座として、法戦式で、本師である私に、首座とお互いお拝をする行事が有りますが、その時の感動は、的的相承の無心の思いが込み上がってきました。

てきてきそうじょう
* 的的相承とは、正しい仏法の継承を意味します。

山内あれこれ

美味しい新米です

新米奉納者

田邊宏一様 (平成26年8月20日)
松本貞良様 (〃 8月21日)
大沼勇様 (〃 8月27日)
花澤基様 (〃 8月28日)
松本金蔵様 (〃 8月31日)
田邊建築様 (〃 9月21日)
小川郁雄様 (〃 10月 3日)

皆様のご寄進ご奉仕に大感謝

音響設備が一新しました

9月3日、石渡與一郎様から音響器具一式の寄贈を受けました。石渡様には長く総代として、真高寺の諸



行事で音響関係を担当されてきました。そのため、前々から設備の老朽化を指摘されておりました。設備が一新し、お蔭ですっかり問題が解消いたしました。



新年を真っ赤な帽子で

12月1日、五井在住の靈園檀家の星野とよ様より、六地藏様の頭巾などが古くなったとして、お揃いの赤い帽子と胸掛けエプロンの寄進をいただきました。お陰



さまで六地藏様のお顔が大いに華やいで、真高寺の参道が明るくなりました。

晴姿をいつまでも

11月26日、木村孝一氏より尚孝上座の法戦式の写真一式（額入り写真2枚、



フォトブックのアルバム、CD)の寄贈を受けました。

境内がいつも綺麗です

最近、いつもお寺に行っても綺麗に芝草刈や本堂裏の山の掃き掃除までされていて、手入れがよくされていると思っていました。これは皆吉在住の久保田和夫さんが草刈や掃き掃除を丁寧に行っているからです。久保田さんは長年関電工に勤められ、定年退職後地元の役に立ちたいと真高寺で尽力されています。元々柿木台の出身のこともありますが、仕事に斑がなく丁寧、然も寡黙で正直な人柄です。先日、仕事中の久保田さんに伺いましたら「境内が広いから、最初に草刈をした所が、一回りする頃には、また草刈をしなくてはいけなくなるので大変ですよ。でも毎日は無理でも体の続く限りはやりますよ」と穏やかに話されていました。因みに、奥様は牛久駅前の山内ビル1階で「久保田美容室」を経営され、正に働き者のご夫妻です。



石渡総代ありがとうございました



石渡與一郎さん

長年に渡り平野地区の総代を務められた石渡與一郎さんが12月31日をもって退任されました。山門解体修理事業時の工事部会で、また駐車場造成やかけ崩れの対応時にはブルヤダンプによる土工事を先頭に立って尽力されました。さらに施食会等のお寺の行事に際しては、マイク・スピーカーの音響機器の操作調整などに一人で担当下さいました。長い間のご奉仕に心から感謝いたします。なお、石渡さんの後任には渡辺哲夫さんが1月1日に就任されました。



渡辺哲夫さん

ほっせんしき 見事な法戦式でした

伊澤住職の次男尚孝さんは、現在西麻布の永平寺東京別院である長谷寺^{ちょうこくじ}へ真高寺の徒弟として3年間の修業に先春から出向いています。修行僧は全国各地から約20名が来ていますが、その20人から一人選ばれて、昨年11月19日に25問の質問に即座に答えるという、「法戦式」に一人でのぞまれました。「法戦式」とは馴染のない言葉ですが、いわ



ゆる曹洞宗における禅問答です。当日は早朝から住職夫妻を初め、根本総代長他7名の役員が立会人として、会場である長谷寺に出向きました。当日は大本山永平寺から管長である福山諦法猊下が見えられ、直々に法戦式を統括されました。本堂のご本尊様の須弥壇の前で25人の先輩僧から矢継ぎ早に質問が発せられます。その問いに対して、猊下より手渡された杖を手にして、淀みなく大声で即答していました。正に熱のこもった見事な問答合戦でした。これで真高寺の後継は安泰だとの印象を強く持ちました。



2014/11/19



かわらけ 土器投げをしませんか

土器投げの実現を目指して委員会を中心に、高倉観音に視察に向かい、お陰さまでこのほど漸く大中小の3組の福輪が完成しました。土器を投げるところは鐘楼の手前です。ここから北側の谷へ向かって投げます。大福輪は直径1.7mの大きさで、30m程先の二本杉の手前、高さは4m、中福輪は直径1.3mで、左点前20m程先の土手の中腹で高さ3m、そして小福輪は直径90cmで、右手前5m程先の土手に高さ1mで設置しました。土器は日干しのために、時が経つと土に還ります。

なお、土器投げは有料です。お皿は3枚一組で200円、5枚一組で300円です。皆さんも真高寺にお参りがてら、土器に願い事を書いて、福輪に向かって投げてください。見事に土器皿が福輪をくぐったらきっと願い事が叶うでしょう。

さすがに業を煮やしました

猪の被害は市原市の中南部では大きな問題となっています。殺生禁断のお寺だからでしょうか、裏山には蚯蚓でも食べたのか、まるで耕耘機で耕したように路や土手が掘り返されて、空いた口が塞がらないほどです。業を煮やしたお寺では、電気の通っていない電気柵のような柵を作って対応しています。また、猪を捕まえる捕獲免許資格を取得するために、市の補助を得て総代の木村稔さんと、木村弥前総代のご子息の木村康先生が東飯給の他の3方と一緒に資格を問もなく取得するそうです。



福達磨を差し上げます

今年も例年のように、大晦日の除夜の鐘に引き続き、午前0時より本堂で大般若経転読による新年祈祷会を行います。参加者にはお寺から福達磨を差し上げます。心を新たにして、一年の最初のお勤めに参加しましょう。きっと良き年となります。是非お出かけ下さい。

なお昨年差上げました福達磨は、除夜の鐘を撞く際に、山門前で焚き上げますのでご持参ください。

31日の9時前までにご持参ください

貴家の墓地の古い塔婆をご持参ください。お寺できちんと焚き上げます。持参場所は参道左側の第一駐車場の奥、石の囲いの中です。費用は無料です。なお、12月31日の午前9時に焚き上げますので、9時前までにご持参下さい。



金蔵さんの山門注連飾りが復活

病氣療養中の名誉総代松本金蔵さんがリハビリを兼ねて、再び山門の注連飾りを御子息も少し手伝って作ってくれました。長年真高寺の注連飾りや松飾を一人で作られてきた金蔵さんは、去年は闘病中で手掛けることが出来ませんでした。お蔭で去年は市販のお飾りで、大きな山門にはどう見ても不向な一寸寂しいお飾りでした。今年は金蔵さん独特の薫の香り豊かな立派な注連飾りが復活したことが何よりです。きっと金蔵さんがモデルのような山門の仁王様が、大きな手をたたいて一番大喜びされているでしょう。



今年の初詣研修旅行は

今年は文福茶釜で有名な館林市の曹洞宗・青龍山茂林寺に初詣をします。その後で、世界遺産となった富岡製糸場などを見学、こんにやくパークでのお買い物の日帰り旅行です。

檀信徒の皆さまへ

ご貴家で万一ご不幸がありました時は、必ず寺の方へ、先ずはご一報下さるようお願いいたします。

また、寺にご意見やご不明な点がございましたら、遠慮なく手紙や葉書、あるいはファックスなどでお知らせ下さい。誠意をもってお応えいたします。